

## D. H. Lawrence, *The Trespasser* 再評価

神谷 正太郎

(受付 2009年10月29日)

### 1

D. H. Lawrence (1885–1930) の小説 *The Trespasser* (1912) への従来の評価は、決して芳しいものではなかった。Ford Madox Hueffer の酷評, ‘The book...is a rotten work of genius. It has no construction or form—it is all execrably bad art, being all variations on a theme.’<sup>1)</sup> は、よく知られている。しかし、その後もこの作品への評価は、低く、前作の処女作 *The White Peacock* (1911) とともに、*The Trespasser* は、Lawrence の若い時代の失敗作と見なされる傾向がある。Gerald Doherty によればこれらの2作品は、小説家 Lawrence の ‘false starts’ にすぎない。<sup>2)</sup>

さらに *The Trespasser* が、Lawrence の Croydon での小学校の教師時代 (1908–12) に同僚の Helen Cork から見せられた個人的体験を記した手記の改作であるという事実も、*The Trespasser* の評価に影響を与えてきた。<sup>3)</sup>

しかし、この作品に好意的な批評がないわけではない。Michael Black は、この作品で Lawrence が主題に没頭するあまり文体が ‘intense’ になり、イメージの用い方も意図的になりすぎる傾向があると批判している。しかし、Michael Black は、この作品の ‘a web of imagery’ の分析によって、*The Trespasser* が意識的な手法による一貫性のある作品であることを論証

---

1) D. H. Lawrence’s letter to Edward Garnett, 18 December 1911. James T. Boulton ed., *The Letters of D. H. Lawrence* Vol. I, (Cambridge: Cambridge U. P., 1979), p. 339. この批判は、*The Trespasser* の第1稿 ‘The Saga’ に関するものである。第2稿が最終稿となったが、いずれにしても Hueffer の批判は、ツルゲーネフやフローベルの ‘impersonal’ な芸術作品を称賛する彼に特徴的なものであった。しかし、以下に述べるように、Lawrence には、‘construction’ や ‘form’ を備えた小説を書く意図はなかった。Cf. D. H. Lawrence’s Letter to Louie Burrows, 9 September 1910. Ibid., p. 178.

2) Gerald Doherty, *Theorizing Lawrence: Nine Meditations on Tropological Themes* (New York: Peter Lang, 1999), p. 17.

3) Helen Cork には、劇場付きオーケストラのヴァイオリン奏者である妻子ある中年の愛人があり、Lawrence と会う一年前の夏に彼と Wight 島で休暇を過ごし、その後男性が自殺するという体験があった。それを記した彼女の手記を改作したのが、*The Trespasser* であった。Graham Hough は、こうした作品の情況設定がありふれた恋愛小説のようで、文章表現が、部分的に ‘the second-hand poetry of the woman’s magazine’ のようだとして批判している。Graham Hough, *The Dark Sun* (London: Duckworth, 1956), p. 34.

している。<sup>4)</sup> これは、この作品がまともに批評するに値することを示した意欲的な批評である。しかし、筆者は、‘a web of imagery’なるものは、Lawrence が彼特有の小説への意図を達成するための手法にすぎないと考える。Lawrence の小説には、Hueffer のいうように ‘construction’ も ‘form’ もないかもしれないが、彼独自の意図があった。その意図を明らかにできれば、この作品をより正当に評価することができるはずである。その点から以下 *The Trespasser* の再評価を試みたい。<sup>5)</sup>

Lawrence の小説の意図を理解するためには、彼の「思想的」面についての検討から始めなければならない。なぜならその面が、当然彼の小説の意図に密接に関わっているからである。

Lawrence は、一般的に肉体的生命や彼のいう「闇」の生命なるものの復活を唱え、精神や光を否定したと受け取られている。確かに肉体や闇の生命の復活は、Lawrence にとって人間が自己を個人として確立するための必要条件ではあったが、しかし、充分条件ではなかった。詳しく論じている余裕がないが、エッセイの ‘The Crown’ (1914)<sup>6)</sup> や *The Study of Thomas Hardy* (1915)<sup>7)</sup> などを見れば、Lawrence にとって精神と肉体、光と闇などの葛藤は、人間や歴史に内在し、それらを前に駆り立てていくものであって、最終的に求められているものは、それらの和解あるいは統一であったことが理解できる。‘The Crown’ で述べられているように、闘う一角獣（精神）とライオン（肉体）は、どちらも決定的な勝利を収めてはならず、それぞれ存在するためには相手を必要とし、彼らがひたすら闘いながら、まれな均衡状態に達したとき、王冠が自ずから彼らの頭上にかかるのである。<sup>8)</sup>

また Lawrence は、‘The Crown’ で「闇」の生命の成就について次のように言っている。

It may be there is a great inequality, disproportion, within me, that I am nearly all darkness, like the night...I shall know the one eternity, the one infinite, the one immortality, I shall have partial being; but never the whole, never the full.<sup>9)</sup>

Lawrence にとって闇の生命の成就是、‘a great inequality’ であり ‘the one eternity’, ‘the

- 
- 4) Michael Balck, *D. H. Lawrence: The Early Fiction* (London: Macmillan, 1986), pp. 78-110.  
 5) D. H. Lawrence, *The Trespasser*, ed. by Elizabeth Mansfield, *The Works of D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge U. P., 1981) をテキストとして使用した。以下引用文の末尾の ( ) 内に引用ページ数を記す。  
 6) D. H. Lawrence, ‘The Crown’, *Reflections on the Death of a Porcupine and Other Essays*, ed. by Michael Herbert, *The Works of D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge U. P.), pp. 253-62.  
 7) *The Study of Thomas Hardy and Other Essays*, ed. by Bruce Steele, *The Works of D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge U. P.), pp. 56-88. pp. 123-28.  
 8) ‘The Crown’, op. cit., p. 262.  
 9) *Ibid.*, p. 267.

one immortality’の成就であったかもしれないが、結局 ‘partial being’の成就にすぎなかった。また Lawrence は、自分が光と闇の2つの ‘waves’ から成っていることを知っているという。

‘I know I am compound of two waves...I am framed in the struggle and embrace of the two opposite waves of darkness and of light.’<sup>10)</sup>

Lawrence の小説は、ここで彼のいう精神と肉体の ‘the struggle and embrace’ を通して、それらの和解つまり充実な存在が可能かどうかを探究するプロセスの表現であった。

ではその探究の表現は、どのような手法によって可能になるのであろうか。そこで重要な意味をもつのが、*The White Peacock* 執筆当時、Lawrence が Jessie Chambers にいった次の言葉である。

“The usual plan is to take two couples and develop their relationships...Most of George Eliot’s are on that plan. Anyhow, I don’t want a plot, I should be bored with it. I shall try two couples for a start.”<sup>11)</sup>

つまり Lawrence は、まず精神と肉体の2項対立の観念にしたがって、男女関係を構想し、後はプロットによらずにそれらの関係を試みていくといているわけである。そこでまた重要な意味をもってくるのが、一見脈絡のない「モザイク的」な挿話の連なりによって小説を展開させるという Lawrence の手法である。「思想」的には精神と肉体は、ぜひ和解させられなければならない。しかし、だからこそ男女関係つまり精神と肉体の関係は、挿話の連なりの中でくり返し試みられていくのである。そこで Lawrence の小説は、その試みの反復によって展開することになる。その時重要なことは、その展開があらかじめ構想されたプロットをたどりながら予定的な結末に到達するものではないということである。それでは精神と肉体の関係を試みることはならないからである。

男女の、つまり精神と肉体の関係を試みるとは、それを情況のままに表現しきることに他ならない。それを可能にするのが、流動的に変化していく人間関係や体験を情況ごとに生き生きと表現する Lawrence の才能である。それによって、ある挿話での男女関係のあり方とともに精神と肉体の可能性と限界が表現されていく。男女関係は、精神と肉対の和解から逸れたり、それを否定する方向に展開するかもしれない。また例えば肉体的生命は、ある情況

10) ‘The Crown’, op. cit., p. 265.

11) E. T., *D. H. Lawrence: A Personal Record* (London: Jonathan Cape, 1935), p. 103.

では素晴らしい可能性を発揮するかもしれないが、状況が変化すれば、怠惰であったり、人生に取り組む意志を欠いていたり、無神経であったりするかもしれない。われわれは、それらの様相をすべて柔軟に受け入れなければならない。そして、Lawrence の人間関係は、くり返し試みられ表現されていくうちに、その可能性と限界に応じて自ずから展開し終熄していくのである。

*The Trespasser* においても、主人公の Siegmund と Helena の関係は、Siegmund の肉体的生命と Helena の精神の関係の試みとして展開していく。*The Trespasser* の主要部は、Wight 島での彼らの 5 日間の休日の描写からなっているが、そのプロセスで彼らの関係が反復して試みられる。われわれは、連なる挿話でのその試みのプロセスについていけばよい。しかし、それを論証するとなると、そう簡単にはいかない。というのは、Siegmund と Helena の関係が、プロセスの表現だとすれば、その一部だけを取り上げたり、その一部で全体を判断したりすることは意味をなさず、またある観念的視点からそのプロセスを型にはめることもできないからである。そこで自己矛盾を犯すようではあるが、あえていくつかの挿話を取りあげて、それらがどのように精神と肉体の関係の試みの表現となっているかを論じて行くことにしたい。

## 2

Siegmund の肉体的生命の可能性と限界を見るためには、休日前夜の彼の様子を描いた第 2 章から入っていくのがよい。しかし、紙数の関係で、少々唐突だが Wight 島での彼と Helena の関係の描写から入っていきたい。ところで、Lawrence の精神と肉体の葛藤の表現にあっては、精神と肉体のバランスの揺れの観念が重要である。ある状況で精神が優勢になると、次の状況で肉体が優勢になり、さらに精神が優勢になるというバランスの揺れの形で精神と肉体の葛藤が展開する。*The Trespasser* においては、そうしたバランスの揺れはそれほど顕著ではない。しかし、それでもその傾向は見られる。

Wight 島に着いた日の夜の第 4 章の冒頭で、Siegmund と Helena は、島を散策中に霧の中で孤立する。‘a web of imagery’ の点から見ると、夜と霧は、Helena の世界の表象としての意味をもち、以後作品の中で重要な役割りを演じる。夜と霧に閉ざされた Siegmund は、いわば Helena の世界に囲まれ支配されているといえるだろう。しかし、霧の中で Helena が寒さに震え始め、Siegmund が彼女を暖めるために抱擁することになる。暖かさと寒さも、それぞれ Siegmund の肉体的生命と Helena の精神の表象として重要である。やがて Siegmund の肉体的情熱が高まり、この抱擁は、性的交わりの暗喩としての意味をもってくる。そこで Siegmund の肉体的生命が優勢になるが、Helena は、魅惑と嫌悪感に揺れ動きながらも反発

し、最後に ‘hurt and crushed’ されたと感じてしまう。

すると次に Helena が、Siegmund に長い特有の接吻をし、それを契機に彼女の精神が優勢になり、バランスの揺れ戻しがくる。そして、次の文章がくる。

When Helena drew away her lips, she was exhausted. She belonged to that class of ‘Dreaming Women’, with whom passion exhausts itself at the mouth. Her desire was accomplished in a real kiss....

For centuries, a certain type of woman has been rejecting the ‘animal’ in humanity, till now her dreams are abstract, and full of fantasy, and her blood runs in bondage, and her kindness is full of cruelty. (p. 64)

この文章は、Helena の本質を述べたものとして、よく引用されるが、しかし、第一に上のようなバランスの揺れの中で見られる必要がある。また上の文章は、いきなり作者が出て来て Helena について解説する形を取っており、ある意味で概念的である。このような文章の危険なところは、彼女と Siegmund の関係へのわれわれの視点を固定化することである。なぜなら彼らの関係の失敗は、確かに「夢見る女」としての Helena の残酷さにも原因があるが、後に述べるように Siegmund の重大な欠点つまり彼の自己確信のなさにも原因があるからである。

ところで、上のような挿話の連続の概要では、とても Siegmund と Helena の言葉や反応のやりとりや彼らの意識の変化の微妙さを表わせない。しかも Lawrence のテキストの魅力は、そうした面にあるのである。

次に上で触れた Siegmund が、肉体的生命を体現するにもかわらず自己確信を欠いていることを示す挿話を取り上げたい。

第6章に Siegmund が海に水浴に行く挿話がある。Siegmund は、‘rocks resembling square altars’ (p. 73) のある白い砂浜を水泳場所を選ぶ。この祭壇に似た岩には、太陽崇拝のイメージがあるが、太陽の熱さは、Siegmund の肉体的生命の魅りにとって重要な意味をもっている。この挿話でも Siegmund は、生き生きとした生命感にみち、素肌に風を感じながら、快活に海に入っていく。しかし、海の水は意外に冷たく、彼はひるんでしまう。しかし、彼はあえて海に潜り、そして、海の水と楽しく戯れ始める。ところが知らないうちに潮に流され、水面下の岩に突き当たってももに傷を受ける。彼は海の残酷さと痛みに眉をしかめるが、海と冷たい水は、作品の中で Helena の表象としての意味をもっており、その点からこの挿話は、彼と Helena の関係の暗喩となっているといえるだろう。

Siegmund は、急いで砂浜に上がるが、ひどい混乱状態に陥っている。‘...his heart and

brain and body were in a turmoil.’ (p. 73) 太陽によって甦った Siegmund の肉体的生命が、海の残酷さによって傷を受け、ひどい混乱状態に陥ったわけである。さらにここで Siegmund の身体が、心臓と脳とともに並列的に並べられていることに注意しなければならない。肉体は、心臓と知性ととともに人間を構成する一要素であって、それらを統一する自己意識があって初めて、人間は個人となるのである。

上の挿話に続いて Siegmund は、岩の中の小さな水溜まりに自分の姿が映っているのを見る。そこで彼は、改めて自分の肉体 ‘his handsome, white maturity’ (p. 74) を眺め直す。しかし、ももの切り傷から流れている血が目に入る。すると Siegmund は、こう思う。

“That is I, that creeping red, and this whiteness I pride myself on is I, and my black hair, and my blue eyes are I. It is a weird thing to be a person. What makes me myself, among all these?”  
(p. 74)

赤い血も自分が誇る肉体も髪も目もみな独立した ‘I’ であり、だとすれば、その中にいる自分とは何者か、というわけである。こうして Siegmund が肉体的生命にあふれていながら自己への確信を欠いていることは、この作品の中心的なモチーフをなしている。その意味で上の想いは、Siegmund の自己探究の契機ともなりうるものである。しかし、上の問いは、彼にとって一時的な思いつきとして過ぎてしまう。彼は、再び彼の申し分のない肉体 ‘his whole handsome maturity’ への誇りに戻っていく。そして、Helena が彼の肉体を ‘baboom’ ででもあるかのように斥けるのを非難する。そして、“Why doesn’t she like me?” (p. 74) と考えるのである。このように Siegmund は、Helena の本質を全く理解していないのである。

ところで他方 Helena の方も、肉体的情熱を鬱屈させた Siegmund が理解できなかつたり、そうした彼からひるんだりする。それらの挿話での、彼らの間の反応のやり取りも興味深い。ところが第 8 章にそのような Helena が、Siegmund の肉体的情熱に応えるところがある。しかし、その動機は、自己中心的である。‘...she desired that he should want *her* madly...’ (p. 87) とところがその結果 Siegmund が、肉体的生命を成就するのに対し、Helena は、自分の魂が破壊されたと感じてしまう。

翌朝 Helena は、海辺に出かけ、冷たく澄んだ水が身体に打ち寄せるのに身をまかせせる。‘...small waves ran up the beach full and clear and foamless, continuing perfectly in their flicker the rhythm of the night’s passion’ (p. 87) この文は、Helena の表象である海の冷たい波のリズムが、肉体的情熱のリズムと同調することによって、それを完全に否定するイメージとなっている。ところがさらに続いて Helena は、朝の烈しい太陽に照らされた空の雲や断崖などの周りの世界が、その物質的な ‘coarseness’ (p. 87) と実体を失い、光と影と色だ

けの世界に変容して行くのを感じ始める。その表現は、濃密な油絵のような実に印象的な筆致によって描かれているが、自然や太陽によって表わされる Siegmund の肉体的情熱の世界が、Helena の個人的世界によって変容させられるプロセスを表わしている。こうして太陽や自然の世界を支配するヴィジョンのような瞬間が過ぎると、Helena は完全に肉体的情熱から清められた世界に甦るのである。

ところで一方その間 Siegmund も、他の場所に水浴に出かけており、その様子が上の挿話と対をなしている。その挿話で Siegmund は、ある洞窟の向こうに新しい入り江を発見して入っていく。ここでも、緑色の海水の透明感や洞窟の岩の質感が、いかにも Lawrence らしい生命感をもって美しく表現されている。入り江に入ってしまった Siegmund は、‘pioneer’ (p. 88) のようにその砂浜に上がって行くが、その白いなめらかな砂は、彼に Helena の肩を思い出させる。砂浜は、暖かく息づく Helena の肉体のようで、Siegmund は、征服した砂に身を投げ出して戯れる。しかし、そのような彼は、また ‘a white virgin blossom’ (p. 88) に入り込むハチにも喩えられる。ハチのイメージも、Siegmund の表象としてこの作品で重要であるが、これは、征服者にふさわしいイメージであろうか。さらに Siegmund が砂に少し深く手を潜らせると、‘deep weight of cold’ (p. 88) を感じて驚く。暖かい砂の表面下のこの重い冷たさも、明らかに Helena を暗示するイメージとなっている。しかし、ここでも Siegmund は、それを大して気にするでもなく、太陽の光の下で Helena の胸の上であるかのようになり砂と戯れ続ける。‘...like himself on the bosom of Helena’ (p. 89)

しかし、その後 Siegmund は、さらに子供のように一心に砂を自分の上に振りかけ、完全にサラサラの身体となり、次いで水でそれを洗うという念入りの儀式によって、太陽の下での完全な浄化と甦りを達成する。

‘It was the purification. Siegmund became again a happy priest of the sun. He felt as if all the dirt of misery were soaked out of him...So white and sweet and tissue-clean he felt, full of lightness and grace.’  
(p. 89)

これは、この作品のハイライトともいうべき場面だが、それは Siegmund が Wight 島に来た目的の完全な成就を意味している。つまりロンドンと家庭の生活の惨めさと疲れから完全に浄化され、肉体的生命の一点の穢れもない甦りを体験するという目的である。‘a happy priest of the sun’ としてのその甦りが、体験として完璧であることは認めざるをえない。しかし、このあまりに美しい甦りは、Helena のイメージをもつ入り江が可能にするのではないであろうか。しかし、おそらくここで Siegmund は、2項対立的なもの、Helena の表象である入り江や砂浜の世界と、彼を表象する太陽と熱の世界の和解を、きわめてまれな瞬間とし

て達成していると見るべきなのだろう。これは十全な存在の一つの形なのである。<sup>12)</sup> それではこの体験は、精神と肉体の和解の可能性を探究するこの小説の「結論」となるのであろうか。逆説的ではあるが、この完璧な体験は、いかにもこの状況にふさわしい形で達成される真実な体験であるがゆえに、過ぎ去っていくのである。ある意味でそれが、われわれを不安定な立場に追いやることは事実だが、Lawrence においては、どのような体験も、その状況だけのものであり絶対的ではない。事実彼は、上の挿話の後で Helena に屈服することになる。

この日の午後、彼と Helena は、島の散策に出るのであるが、島の散策も、海での水浴と同様に Siegmund と Helena の関係の試みにとって重要である。ここでは彼らは、帰路に就こうとするころに暗くなってきて道に迷ってしまう。ところで Siegmund と Helena が散策する挿話では、彼らはよく道に迷う。それも Helena が、行く方角を決めた後に迷うのである。この成り行きは、彼らの関係のあり方を暗示している。彼らの関係は、Helena のイニシアティブによって行く先も分からず展開するからである。しかも、Helena は、夜道に迷うことを恐れるどころか、かえって楽しんでいる気配がある。夜道に迷うというのは、Helena の夜の世界に Siegmund を誘い込むための彼女の意識せざる策略なのである。しかし、他方で問題なのは、Siegmund も道に迷うことをさして気にもしていないことである。そして、Helena が夜の世界の驚異を語ったりすると、Siegmund は、次のようにいったりする。“You seem to have knit all things in a piece for me. Things are not separate: they are all in a symphony.” (p. 98) Siegmund は、夜の世界の魅惑に屈することによって Helena に屈しているのである。

この挿話でも、Siegmund と Helena の言葉や感情の細かいやり取りを、捨象した説明の仕方では全く意味がない。しかし、ともかくこの後に Helena は、ロマンティックな気分になり、ドイツロマン派の詩をいくつか口ずさむ。空想的な妖精や魔法の世界と戯れる詩である。月が昇ってくると Helena は、いきなり Siegmund に月を見るようにいう。Siegmund が月を見ると、‘...there was a gleaming pallor on his chin and his forehead, and a deep black shadow over his eyes and his nostrils’ (p. 102) ということになる。ここでは、Siegmund 個人の相貌は失われ、彼の顔が光と影の不気味な仮面のようなものとなっている。彼が Helena の魔術の世界に取り込まれ、変容させられてしまっているのである。

12) John E. Stoll は、この作品を痛烈に批判しながらもかなり詳細に分析しているが、この挿話に関して、前の Helena が世界が変容するヴィジョンを見る挿話で、太陽の光は、すでに Helena の ‘all-consuming possessiveness’ の表象となっており、したがってこの Siegmund の魅りも完全に Helena の支配下にあると解釈している。John E. Stoll, *The Novels of D. H. Lawrence: A Search for Integration* (Columbia: University of Missouri Press), 1971, p. 47. 一方 Michael Black は、太陽の意味をあえて特定していない。‘The sun is the one persistent but mysterious positive; often mentioned; never directly identified.’ Michael Black, op. cit., p. 94.



Helena は、さらに彼に呼びかける。“You are the big flowers, Siegmund; yours is the bride-groom face, Siegmund, like a black and glistening flesh-petalled flower, Siegmund, and it blooms in the Zauberland, Siegmund; this is the magic-land.” (p. 102) 昼間は精神的で繊細な Helena が、男を魅惑する魔女としての本性を現すところである。さらに彼女は星も海も木立もみな接吻し合っており、みなが月に向かって接吻しているなどという

その間 Siegmund は、打ちのめされ、半分意識を失ったようになっている。そして、彼は、Helena を見上げながら、“Hawwa, —Eve—Mother!” (p. 103) とつぶやく。そして、以下の文章が続く。

‘Her compassion, her benignity, seemed so different from his little Helena. This woman tall and pale, drooping with the strength of her compassion, seemed stable, immortal, not a fragile human being, but a personification of the great motherhood of woman.’

(p. 103)

いつもの ‘his little Helena’ が、大いなる不滅の母性の相貌を現すのである。

さて、この後 Siegmund は、肉体的生命の極度の崩壊感覚ともいべきものに襲われるのだが、それは恐るべき体験として表現されている。奇妙なことは、その原因が Helena にあるのは明瞭であるにもかかわらず、Siegmund が、それを理解しないことである。“Good Lord!... I wonder what it is.” (p. 105) といった言葉を彼はくり返す。くどいようだが、Helena の支配もさることながら、こうした Siegmund の認識力の欠如が問題なのである。

ところでこうした挿話の他にも多くの重要な挿話がある。肉体的生命を表象するはずの Siegmund が、島を散策中教会でキリストの生き方に感情移入をしたり、かと思うと彼が、月の光が海を照らす光景を生命によって変容させられた世界として見て、Helena から夜の世界の支配を奪ってしまうような挿話もある。また後に見るように Helena の方も、太陽と海の世界に対して Siegmund の肉体的生命と見紛うような体験をすることもある。Michael Black は、この作品で Lawrence が ‘uniformly figurative prose’ によって人物の区別を曖昧にする傾向があることに言及しているが、<sup>13)</sup> こうした挿話は、一見確かに当惑的に見える。しかし、Lawrence は、Siegmund と Helena にとって可能な限りの体験を表現しようとしているのであり、まさにそのことが、Lawrence が Siegmund と Helena の関係を探究していることの証しなのである。

---

13) Michael Black, op. cit., p. 81.

3

さて、第13章に特別の挿話がくる。上で述べたように認識力を欠いた Siegmund を目覚めさせるための挿話である。この章は、上で彼が Helena の支配に屈服した夜の翌朝に当たるが、Siegmund は、港でいきなりロンドンのかつてのヴァイオリニスト仲間の Hampson という男と出会う。そして、彼から自分の生き方を様々に批判されることになる。後に Siegmund がいうところでは、Hampson は彼の「分身」‘Doppelgänger’ (p. 115) のような人間であって、Siegmund の人間性を鋭く見抜き、彼の女性との関係について、また Siegmund 自身に関する問題についていろいろと警告を発する。このような章が、小説の展開のまさにこの段階で挿入されるのは実に適切である。Michael Black は、Hampson の章を作者による ‘deliberate insertion’ だといっているが、その通りである。しかし、Michael Black は、この小説を Siegmund と Helena の関係の探究のプロセスの表現として見る視点に不思議に欠けているのである。<sup>14)</sup>

Hampson は、Siegmund は、現実世界の外に大きな ‘intense life’ (p. 111) を求めている人間だという。これは、ロンドンに妻子ある家庭を残して、Helena と Wight 島に来るような Siegmund の生き方を揶揄しているのである。しかし、Hampson によれば、このような生き方は致命的であって、現実世界の外の大いなる生命など死に外ならない。そんなものを求めていると、いずれ現実世界にも自分にも裂け目ができて、そこから自分が ‘leak’ (p. 111) することになるという。

Siegmund が自分はそんな人間ではないというと、Hampson は、“Praise God, I’ve met a poet who’s not afraid of having his pocket picked—or his soul—his brain,” (p. 111) という。この言葉は、ぼんやりと現実の彼方ばかり見て、魂も脳みそも失っている Siegmund を皮肉っているのである。それに対して Siegmund は、自分は肉体的生命にあふれているというが、Hampson は、中年の Siegmund はすでにその盛りを過ぎており、しかも彼は、肉体的生命を過剰に燃やし尽くして、いきなりぶっ倒れることになるだろうという。Hampson によれば “You’ve not dispassionate intellect to control you and economise.” (p. 111) ということになる。Siegmund は、自己を個人として確立するためには、肉体的生命ばかりでなく知性を必要とするのである。

さらに Hampson は、Siegmund の女性関係も警告するが、そこでよく引用されるのが、Hampson の次の言葉である。

---

14) Michael Black, op. cit., p. 82.

“The best sort of women—the most interesting—are the worst for us... These deep, interesting women don’t want *us*: they want the flowers of the spirit they can gather of us. We, as natural men, are more or less degrading to them and to their love of us. Therefore they destroy the natural man in us that is, us altogether.” (p. 112)

Hampson の言葉は、これだけが注目される傾向があるが、彼の他の言葉も、小説にとって実に重要な意味をもっている。この言葉でも Hampson は、Siegmond に早く Helena の本性に目覚めるように警告を発しているのである。さらに Hampson は、Siegmond の肉体的生命を理解しない女たちを非難し、Siegmond に同情さえしてくれる。しかし、それでは現実的に Siegmund は何をすべきなのかということになると、Hampson は何もいってくれない。というのは実は彼自身がいうように、Hampson も現実世界の彼方を見つめる類いの人間の一人であり、彼も女性関係では酷い目に会ってきたらしいからである。彼と Siegmund は、分身同士として同じ人格の知性と肉体を表わしているといえるだろう。したがって Siegmund の生き方についても、自分の生き方についても、Hampson は解答をもっていないのである。彼の退場はやや自嘲的である。しかし、ある箇所 Siegmund は、“You make me feel—as if I were loose, and a long way off from myself,” (p. 112) という。この自己認識こそ、Hampson の辛辣な言葉がねらったものなのである。ところが、Hampson と話した後 Siegmund は、その会話を ‘painful dream’ (p. 113) のように感じるものの、やがてそれも取るに足りないことのように思われ、すぐに忘れてしまうのである。

#### 4

さて、この Siegmund と Hampson の会話がなされるのは、休暇が終る前日の朝ということになっており、Siegmund と Helena は、翌日はロンドンに帰らなければならない。さらに彼らの関係は、未だ何の成就も見出していない。これらのことが以後の Siegmund と Helena の関係に影を落とす。さらに何の解決も見出せないことで、Siegmund の肉体的生命と Helena の精神が、退廃の徴候を示し始める。これに関して興味深い挿話が、Hampson の章の次の第14章にある。

Hampson との会話の後 Siegmund は、Helena とまた散策に出るが、ある丘陵の上に出たとき、麓の方で農夫の一家が羊を水桶の中に浸けて洗っているのが見える。Siegmund にとっては、それは古代から全く変わらぬ羨むべき農夫の生活に見える。“In an instant, it makes me wish I were a farmer,” と彼はいう。“It would be fine to be plain-minded, to see no further than the end of one’s nose, and to own cattle and land.” こうした Siegmund の言葉に対して

Helena は、懐疑的である。しかし、Siegmond が、さらに肉体的愉悦と快適な眠りにみちた生活への憧れを語ると、Helena は、苛立って、“It amuses me to hear you long to be stupid,” という。しかし、それでも Siegmond が、農夫になるためなら何を与えてもいいというと、Helena は、“That is, not to be yourself,” と突っぱねる (p. 117)。

このような Helena の反応は、この小説を Siegmond の肉体的生命に残酷な Helena が彼を墮落させる話として見るなら、そのような彼女の批判されるべき本性が表われたものということになるだろう。しかし、この会話では、Helena の反応の方が正しいと筆者は考える。Lawrence は、Siegmond の農夫の生活への回帰願望を肯定していない。Siegmond の願望は、‘partial being’ への退行現象なのであり、‘stupid’ になりたがることであり、自分自身ではなくなることなのである。<sup>15)</sup>

Siegmond が失敗するのは、まさにその点においてなのであり、この点がこの小説では極めて重要である。そして、その失敗が、他ならぬ彼の肉体的生命の退廃を招くのである。

上の挿話の後、早速 Siegmond が崖の上の草地で仰向けになって、眠りながら太陽の光と熱を浴びる挿話がある。彼が太陽を浴びる挿話は、実は作品の中でこれまでもくり返されており、太陽の熱によって肉体的生命を回復したいという Siegmond の欲求を表わしている。ところでこれらの挿話に特徴的なことは、どの挿話でも太陽の強烈な光と熱が Siegmond の額に当たる様が描かれることである。その意図は、肉体的生命の甦りのためには太陽が必要であるとしても、過度な太陽の光と熱は、知性を冒す可能性があることを暗示することである。そればかりではない。この挿話で Helena が、Siegmond の草の上に投げ出された腕を見ると、熱く鬱血してむくんでいるように見える。そのややグロテスクな描写は、過度な太陽の熱によって Siegmond の肉体が生命の表象というよりも、ただの物質としての肉体に退廃しつつあることを表わしている。

一方 Helena の方はというと、夜と月の世界ならともかく、烈しい太陽の光と熱の下で気分が悪くなり始める。そして、彼女は、“‘And there shall be no more sea,’” (p. 119) という「ヨハネの黙示録」からの文を引用する。まるで海に表象されてきた Helena の世界が、終末論的な世界の中で干上がってしまうかのようなようである。さらに彼女は、自分が熱い炉の中の ‘a heavy piece of slag seamed with metal’ (p. 119) になったような気分になる。これは、Helena

15) Lawrence は、*Studies in Classic American Literature* (1923) の中で Herman Melville の *Typee* に見られる南太平洋島民への回帰願望について次のようにいっている。‘But we can’t go back. Whatever else the South Sea Islander is, he is centuries and centuries behind us in the life struggle, the consciousness-struggle, the struggle of the soul into fullness... We can take a great curve in their (the savages’) direction, onwards. But we cannot turn the current of life backwards...’ D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, ed. by Ezra Greenspan. *The Works of D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge U. P., 2003), p. 127.

の実質が、溶鉱炉の中の鉱石の残滓に還元されてしまった異様なイメージだが、ある状況での人間の存在のあり方を端的に物質的イメージで表現する Lawrence の特質を示している。ここでの Helena は、‘Eve’あるいは‘Mother’として圧倒的な支配力を見せた彼女の対極にある。<sup>16)</sup>

これ以後の一連の挿話、つまり Helena に Siegmund が突然魅力を失ったただの中年男に見え始め、Helena が絶望し、そうした彼女を Siegmund が抱き締め、その ‘brute embrace’ (p. 126) に彼女が抗い彼を拒絶すると、今度は Siegmund が絶望して、地面に倒れ伏すなどの挿話——こうした要約は、変化に富んだテキストの展開を冒すものだが——これらの出来事の背後にあるのは、Siegmund の肉体的生命と Helena の精神の退廃なのである。とりわけ地面に倒れて起き上がろうとしない Siegmund の描写は、大地に帰りたいという彼の欲求と肉体的生命への彼の絶望感を痛切に表現している。

そして、さらにいくつかの挿話が経過した後、Helena が先ほど Siegmund の抱擁に抗ったことを謝ると、Siegmund は、次のようにいう。

“Four days is enough,...In a fortnight I should be intolerable to you. I am not masterful...I give way always,...and then—tonight!”... “And I can’t bear to compel anything, for fear of hurting it. So I’m always pushed this way and that, like fool.” (p. 131)

Siegmund は、Helena との関係が成就しないのはすべて自分がイニシヤティブを取れなかったためだと考えている。こうした彼の自己認識は正しい。ただし、彼が誤っているのは、自意識過剰なあまり Helena との関係の失敗の全責任を背負い込んでしまうことである。実は彼女も、上で太陽の光と熱を浴びて不安と孤独感に襲われて以来、自分がいかに他人に対して破壊的であったかを意識して良心の呵責に苛まれていたのである。こうした彼らの自己確信のなさが、彼らの関係を失敗に導くのである。

しかし、Lawrence は、彼らがロンドンに帰る日に、さらに彼らのそれぞれにとって重要な意味をもつ挿話を用意している。

その日の朝、Siegmund は、再び以前と同じ ‘his usual altar-stone’ (p. 134) のある海岸に水浴に行く。世界のすべてが彼に親しくやさしいように見え、Siegmund は、その魅惑的な世界を見て Helena のことを連想する。そして、今更のように、“...she is right, it is all

---

16) 作品の中で太陽の光と熱でさえも Helena の支配下に入っていくと解釈する John E. Stoll は、この Helena が太陽によって ‘a heavy piece of slag’ のように感じる挿話については触れていない。これは、Lawrence の登場人物をその一つの面によって解釈する例である。Cf. John E. Stoll, op. cit., pp. 47-8.

enchanted. I have got into her magic at last.” (p. 135) などと考える。そして、彼は、以前に発見した洞窟の向こうの入り江に入っていくのであるが、しかし、ここでも危険で気味悪い海底や洞窟内の有様が、印象的な自然描写で描かれている。水の妖精が上に上がろうと髪をふり乱してもがくような水底の海草は、Siegmund を恐れさせるが、これは Helena の魅惑的な空想世界の不気味な恐ろしい面を暗示している。さらに早い流れにのって洞窟を抜けるとき、Siegmund は、今度はひじを岩にぶっつけて傷を負う。またもや彼は、急いで入り江の海岸に上がるが、これが契機として、生命が美しく戯れる周りの世界との疎隔感が生まれ、Siegmund は、Helena の魅惑された世界が結局 “illusion” (p. 136) であると悟り、世界からの除け者の孤独感と自分の存在の無意味さに悩むことになる。

他方 Helena の方も、この方は初めて同じように洞窟を抜けた別の入り江に入っていく。ところが彼女が魔術的な洞窟を抜けると、圧倒的な太陽の光に燃えるように輝く空と海の世界が彼女に立ちのぼる。‘The sea was transfused with white burning, while over it hung the blue sky in a glory, like the blue smoke of the fire of God.’ (p. 138) Helena は、その光景を崇拜しながら立ち尽くす。‘She felt herself confronting God at home in his white incandescence, his fire settling on her like the Holy Spirit’ (p. 138) この自然界における神との交感、まるで Siegmund と Helena の役割りが逆転したかのようで、われわれを驚かせる。しかし、この箇所では、Lawrence に上の Siegmund の体験に対してバランスの揺れをきかせる意図が働いていることは間違いない。もっとも Helena も状況が変化すれば、すぐにこの超越的な感覚を感じなくなるのであるが、それでもこの挿話は、彼女にとって Wight 島での休暇に肯定的な意味を与える体験となるのである。

こうした Helena は、Siegmund の孤独感を理解せず、彼をますます孤独にする。その日の午後になると、尽きていく休暇の時間に対して彼らができることはほとんどない。彼らは、またもや散策に出て、Siegmund は Helena が気が進まないにもかかわらず、あえて太陽が烈しく照りつける熱い海辺に降りて横になる。彼は、これを限りに太陽の熱と光を浴びるが、これは明らかにやり過ぎである。ここでも Siegmund の頭に燃えるような太陽の光が当たり、Helena が心配するが、Siegmund は、‘stupidly’ (p. 147) に笑うだけである。彼らは、会話をしながら時を過ごす、さすがに休暇の終わりの時が迫って Helena が Siegmund に起きるように促しても、彼はなかなか身を起こそうとしない。その有様は、彼の肉体的生命の最終的な退廃ぶりを示している。

こうして Siegmund と Helena は、互いの関係に何の解決も見出せず、疎隔感を抱えたままロンドンに帰ることになる。その帰路にも重要な挿話があるが、いずれにしても彼らの関係は、彼らが彼ら自身の限界を乗り越えることに失敗したことによって終熄に向わざるをえないのである。

そして、ロンドンに帰った Siegmund は、これ以上ないほど屈辱的な形で敵意にみちた家族と再会させられることになる。そして、彼は2日目の朝に自殺してしまうのであるが、しかし、問題は、それが彼と Helena の関係と小説の結論にも結末にもならないということである。その死は、確かに同情に値するかもしれないが、しかし、それは、悲劇的な結末ではなく、何を購うわけでもない。Siegmund と Helena の関係が何の解決にも達しないことが、Siegmund を死に追いやるのであるが、まさにその経緯が彼の死から意味を奪うのである。そこで Lawrence は、そこで小説を終ることができず、Siegmund の死後妻の Beatrice と子供たちがどうなったのかを、今度は徹底した realism で約30ページにわたり延々と描いていくことになる。Beatrice は、決して魅力的な人物ではないが、一年後に下宿屋を開いて自活できるまでになり、夫に先立たれた寡婦としての自らの生き方を正当化できるようになる。そして、最終章には、Siegmund の死後一年もたたないころ彼の死の後遺症から立ち直れない Helena に Celcil Byrnnne が再起を促す挿話がくることになる。こうした操作が必要であったということ自体が、この作品が Siegmund と Helena の関係が反復して試みられ、彼らの限界のままに終息するプロセスとして表現されていることの結果なのである。

付記：本論は、「シェイクスピアと現代作家の会」(2009年9月13日：於広島修道大学)での口頭発表に加筆修正したものである。

Summary

A Revaluation of D. H. Lawrence's *The Trespasser*

Shotaro Kamitani

*The Trespasser* is the most criticized and slighted of D. H. Lawrence's novels. If, however, Lawrence's intention in his novels is properly understood, the novel will be seen as deserving much more serious critical attention. Lawrence's intention in his novels lies not in creating a work of art but in trying or exploring the relationship of the sexes, that is, of spirit and flesh. Lawrence's well known word to Jessie Chambers when he is writing *The White Peacock*, "...I don't want a plot...I shall try two couples for a start" is very important, because it explains why Lawrence develops his novels trying the relationship of the sexes in a sequence of apparently disconnected episodes. He doesn't 'want' the plot because it is not an appropriate means to try the relationship of the sexes in the successive episodes. Lawrence's novels develop with the trials or explorations of the relationship of spirit and flesh, which is Lawrence's peculiar method.

The relationship of Siegmund and Helena in *The Trespasser* is also a process of trial or exploration of the relationship of flesh and spirit. The final fulfillment to be sought is the reconciliation of both, which, however, they fail to achieve. Helena's aversion to flesh and motherly possessiveness is, of course, to be blamed but she is by no means wholly responsible for their failure. Siegmund's inability to tackle life and his lack of definite will to establish himself are also serious faults. Lawrence tries and explores their relationship in the sequence of episodes expressing the various phases of their characters and those of spirit and flesh. He does not compel the relationship of Sigmund and Helena but lets it develop of its own accord to its own ending. What is before us is the expression of the various aspects of the characters and of spirit and flesh and of the whole process of the human relationship, which is Lawrence's significant achievement.